

# 漢字はホントは面白い

杉本浩

漢字の勉強が面白いなんて、小中学生に聞かれたら変人扱いされそうですね。私も子どものころは漢字が嫌いでした。

40代半ばに、たまたま白川静著「漢字」(岩波新書)を読み、漢字の成り立ちの面白さに取りつかれ、以後研鑽を積んで、一昨年には「漢字教育士」(立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所 認定)の称号を得、また今年1月1日には自分のホームページを開設しました。 ～「漢字教育士ひろりんの書齋」で検索!～

私が特に関心を持っているのは、「字源」、つまり個々の漢字はどういう意図のもとに作られたのか、字の部分部分は何を表したもののかななどを、古代の文字に遡って探る分野です。

当然ながら、この研究にはできるだけ古い文字資料を検討する必要がありますが、最古の資料である甲骨文は19世紀末に発見されたばかりで、字源についても諸説ある文字が多く、「どの説がもっとも正しいか」などと素人でもワイワイということが可能です。

以下に、建築関係の漢字をいくつか例に挙げて、その成り立ちや字の本来の意味を解説しますが、もちろんこれも、いくつかあるなかで、私が「もっとも正しい」と思っている説にすぎません。(主として白川静著「字統」(平凡社)の説によりますが、必要に応じて他の説も紹介しました。) そのつもりでお読みください。

漢字の何がそんなに面白いのか、その一端をわかっていたいただければ幸いです。

## ◎用語解説

- ・**甲骨文** 現存する最古の漢字。殷代後期(約3300年前)に登場。占いの内容や結果を亀の甲羅や獣骨に彫り込んだもの。
- ・**金文** 青銅器の銘文として鑄込まれた文字。殷代末期(約3100年前)に登場し、周代に盛んになった。
- ・**篆文(小篆)** 秦の始皇帝が定めた統一書体。約2200年前。



建 小篆

**建** 廾は廷を意味し、宮廷の中庭の周囲の壁の形という。聿は筆を手(冫)で持っている形。宮廷などを建てる際、現地で測量などを行う意味と思われる。



築 小篆

**築** 筑が元の字。工は工具の形で、その右は工具を両手で持っている人。古い字書に「搆(つ)くなり」とあり、現代でいう版築工法で城壁などを築くことをいう。殷代初期の都(二里岡、紀元前15世紀ごろ)に、版築工法の城壁が残されている。日本語の「きずく」というのも、「城(き)築(つ)く」からきているという。「つく」

は「土や石を突き重ねて積み上げる」こと(広辞苑)。



家 甲骨文 (犬?)



家 甲骨文 (雄豚?)

**家** かつては、屋根の下に豚が居るから豚小屋のことだ、などというひどい説があった。ウカンむりは建物の屋根の形だが、ただの建物ではなく神聖な廟(みたまや、祖先を祭る建物)の屋根である。その下の冢については説が分かれる。一説は、この字の場合は犬で、地鎮のための犠牲として犬を埋めた神聖な建物であるとする。他説は、意味は同じく廟だが、豕は豨(カ、雄豚)という字の省略形で、単にカという音を示すというもの。甲骨文を見ても冢の形の違う2系統があり、かつては別々の字だったのかも知れない。



室 甲骨文



矢 甲骨文



屋 小篆

**室** 至は矢を上下反対にした形。矢を放って落ちた地点を、神の意思にかなう地として敷地に選定し、そこに建てた神聖な廟の部屋をいう。単に人が至る場所、という説もある。

**屋** これも至に従う字で、「もがり」(本葬をする前に、棺に遺体を納めて仮に祭ること)のために建てた建物を表す。ただし、尸は「しかにばね」即ち遺体のことか、単に屋根の形なのか不明。



宅 甲骨文

**住** 比較的新しい字で、小篆は存在しない。主は発音を示す。「人が主と書いて住」というのは、住宅会社が流した俗説。

**宅** 廟に居ること。もとは動詞だった。ただし毛が何を意味するのか不詳。



工 甲骨文

**工** 工具の形というが、金属を打つ台(かなとこ)とする説、「のみ」とする説がある。周代には、王に属する職人・技術者を総称して百工と言った。



構 小篆

**構** ツクリは上下対称で、同じ形の飾りひもを上下につなぎ合わせた形、または木材を積み重ねた形。組み合わせること、結合することを表す。そういえば、「構」なんて色っぽい字もあった。構は木材を組み合わせてものを作ることを言う。



柱 小篆

**柱** ツクリの主は発音を示すとともに、燭台の形を表す。燭台のように直立する木材を柱という。



床 小篆

床 床は新しい字。元の字は牀で、ベッドを表す。牀はベッドが90度回転した形。日本に入って「ゆか」の意味になった(中国の平屋建築には、通常床はなかった)。ベッドと人を合わせたものが牀であり、病の元の字。

ちなみに、牀は版築工法の型枠を意味する場合もあり、版のへんは牀の左右対称形。片という字は、二枚一組の型枠の一方ということの意味した。



壁 小篆

壁 辟に「避ける」の意味があり、壁は風や寒さを避けるもので、「かき」や「かべ」のこと。



辟 甲骨文

辟(へき)はもともと、罪人の腰の肉を刃物(辛)で切り取るという恐ろしい字だが(甲骨文を見ればよくわかる)、さまざまに意味が変遷したようである。

\*\*\*\*\*



規 小篆

規 へんは「おと」ではなく、製図用具のコンパス(日本語で「ぶんまわし」)の形。見は目を見開いて見つめる人で、字としてもコンパスを意味した。

定規という語に使うのは、後世の用法。



矩 金文

矩 巨が矩の元の字で、さしがねを表す。金文ではそれを手に持つ人の形が加えられ、のちに矢の形になった。直角を意味し、長方形のことを矩形という。「規矩」とあわせて、円弧・直角を描く道具。

巨の本来の部首は工で、金文のとおり上下

の横線が縦線から左へはみ出していたが、今の常用漢字の字体では、区などの「はこがまえ」と区別がつかなくなっている。



後漢(1~3世紀)の画像石。右(伏羲:ふくぎ)が持っているのが直角定規(矩)、左(女媧:じょか)が持っているのがコンパス(規)。二人は大洪水で生き残り、人類の始祖となったという、アダムとイブとノアを足したような伝説の主人公。

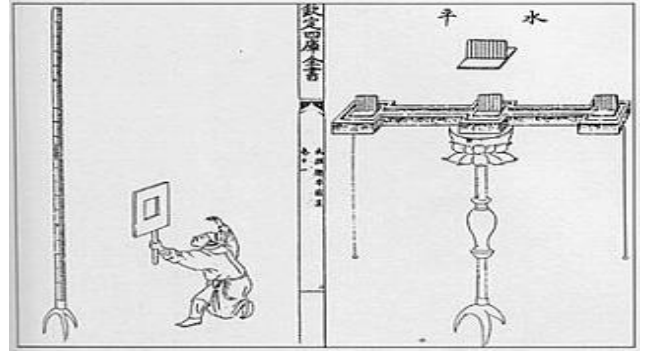
古代中国に「天円地方」という世界観があり、規は天空(円)を、矩は大地(方形と考えられていた)を象徴している。



準 小篆

準 隼は発音を示す。水平を測る道具のこと。日本語で「水盛り」というのと同様、中国でも水を使って測定したので、さんずい偏がついている。具体的にどのような道具だったか。時代は大幅に下がるが、唐代末期(900年ごろ)の兵法書「太白陰経」に、当時の水準器

が図解されている。



右図の水平材に三つの池とそれらを結ぶ溝を掘り、池に浮きを浮かべる。三つの浮きを見通して、左図の標尺の目盛を読む。精度に疑問はあるが、ホースもない時代なので仕方ない。一説には、右図の水準器の形が飛んでいるハヤブサに似ているため、隼の字が用いられたという。

水盛りは建築のよりどころを決める重要な作業なので、基準・標準・水準などの語ができた。



繩 小篆

繩(縄) ツクリは発音を示す。もちろん「なわ」のことで、昔も今も、水糸など現場で直線を出すために使われる。墨繩としての使用方法も古代からのもの。まっすぐ張るところから、この字に「のつとる」「正す」という意味ができた。

続けて書くと「規矩準繩(きくじゅんじょう)」という四字熟語となり、物事や行動の規準・手本となるものを意味する。

出典は「孟子(離婁(りろう)章句上)とされる。

『聖人既に目の力を竭(つく)し、これに繼ぐに規矩準繩を以てす。以て方員平直を為すこと、用うるに勝(た)うべからず』

(訳) 聖人というものは、自分の目の力を存分に使ったうえで、コンパス・定規・水準器・墨繩もまた使う。だからいくらでも四角形・円・水平線・直線を作ることができる。

⇒これは、「単なる善意だけでは政治はできない。また法律があるだけではそれは有効には働かない」ということを述べる文章の一部。「方員平直」の員は、圓(円)の元の字。

いかがでしたでしょうか。「面白い!」と仰ってくださいる人が多ければ、来年もまた投稿したいと思います。

(文中の古代文字は、台湾・中央研究院のウェブサイト「漢字古今字資料庫」から転載しました)